

## 5.2 森に育まれる文化

### 5.2.1 日本の森林文化

#### 1) 日本の民俗にみる森林

i) 山の民 古来、日本の伝統的な民俗社会において、森林はモリ、ヤマと称され、林業、狩猟、焼畑、採集などの生業の場として多くの人々の生活を支えてきた。森林は、平野に住んで稲作を中心に生活を成り立たせる多くの農民にとっては、刈り敷きなどの肥料や薪炭、山菜・キノコ類などの食材、竹・用材など生活に必要な物資を供給する重要な空間であった。そのため、近世段階までは多くの森林が人会によって共同的に利用されていた。さらに、このような平野村に居住する人々よりも、よりいっそう森林に依存する人々が、日本の山中にはいた。山住まいの彼らは、その生活の糧を森林に生える植物たち、および森林に生息する動物たちから直接得て暮らしていたのである。

日本には多くの森林の民が居住し、平野部に住む人々とは異なる生活形態を保持していた。森林の民として、まず東北・中部地方を中心に分布した専門的狩人集団・マタギを挙げることができる。彼らは獲物を管理し支配する山の神を崇拜し、その神から獲物の動物たちを恵みとされると考えていた。そのため神の住む森林に入るときには十分に精進潔斎をするとともに、山中ではヤマコトバ（山言葉）という忌言葉、隠語を用いて、日常的な生活と聖なる山中での生活とを区別していた。

轆轤を用いた木椀をつくる職能集団・木地師も森林の民の1つである。近江小椋谷（滋賀県）を本地とし、惟喬親王を職の祖神として崇拜する彼らは、朱雀・正親町天皇の綸旨や織田信長・豊臣秀吉などの免状など、森林の樹木伐採に関する偽文書を保持して全国の山々を歩き回り、自由に木々を利用していたという。今でも各地の山中に彼らの定着した村が残っている。

そのほか、今ではその姿をみることはできないが、箕や箆などの竹細工をして山中と里を往復していたサンカ（山窩）や、砂鉄を多く産出した中国地方の山中で活躍した鉄精錬の職能集団・たたら師なども、移動性、漂泊性をもって山岳地帯を闊歩した森林の民である。

このように日本人の生業と深く結びつく森林は、さらに、日本人の精神文化と深くかかわる空間でもある。人々は、森林をこの世とは別の異界とみなし、得体の知れない異人の住むところと考えた。そのため、幻想の森林の民ともいえる山男や山鬼、山姥、山姫など山人の説話が各地に伝えられる。また、森林は畏怖の念をもってみられる神が住む聖なる空間とも考えられ、さまざまな儀礼や信仰を付随してきた。

ii) 異界としての森林 日本において、聖地としての森林の代表的なものに、沖縄の村々にあるウタキ（御嶽）がある。嶽は森と同義であり、この森は沖縄本島でウ



図 5.3 沖縄県黒島の聖なる森ワン

ガン、ムイ、八重山諸島ではワン、ワーなどの異称をもつ。いずれも村落祭祀の中核となる聖なる森である。18世紀初頭に編纂された『琉球国由来記』には、800以上の聖なる嶽や森の名が記載されている（図5.3）。ウタキには、ビロウ（クバと呼ばれる）、ガジュマル、マツ、月桃（サニンと呼ばれる）など多くの樹種が手つかずのまま残されている。そのウタキのなかの木々には神が宿るものとされ、伐採することはもちろん、落ちた枯れ枝をウタキの外に持ち出すことさえ禁じられている。ウタキの最深部はイビ・イベと呼ばれ、今でもノロ・ツカサという巫女が、村あるいは親族の祭祀の場として厳密に管理し、男性の立ち入り禁制が守られている。そこには、神が宿るとする大きな岩や老樹が座しており、その聖地性は顕著である。

このように特定の森を信仰的に特別な空間として認識する事例は日本本土にもみられ、モリサン、モリサマ、モイドン、モリなどと各地で呼ばれている。聖なる森を祭場となし、神々の依り憑く樹木を祀る信仰である。現代の日本人が、前近代的な神秘的森林のイメージとしてまず思いつくのは、神道に洗練された神社のモリ＝杜であろうが、その成立する前段階として、社殿・神体ではなく森林自体を神体として祭祀した信仰が措定される。このような信仰は西日本に卓越しており、モリガミ（森神）信仰と総称される。福井県大飯郡大飯町大島にある32か所のニソの杜はその代表例である。

大島では毎年11月22、23の祭日にニソ講、モリ講、モリマツリと呼ばれる霜月祭りが行われ、その年の収穫物をモリの神へ供えて豊作を感謝する。タブヤシイ、ツバキなどが繁茂し、霜月祭りの祭日以外には立ち入ってはならないとされる。モリガミは機能的には水神、農耕神、土地神などの多様な性格を複合的に有し、そのモリに宿る霊的存在は動物霊や落人など御霊的性格を秘めた死霊の場合もあるが<sup>21)</sup>、一般には、このモリに宿るものは、先祖の霊が浄化した祖先神であると解釈されている。

民俗学の父・柳田国男は日本の多くの民俗事象を詳細に検討して、日本人の基層にある祖霊信仰を明らかにした<sup>22)</sup>。それによれば、日本の民俗社会において死者の靈魂

は、木々の生い茂る山深い森林に集まり、徐々に霊としての人格的存在から死穢を浄化されて、個性を失い昇華させるという。そして、最終的には神になって、先祖祭りや収穫祭など1年の折々に山から下りて里の子孫のもとを訪れ、幸をもたらすという。このような日本人の霊魂観の原初的形態が、最も顕著に現れているのがモリガミ信仰である。

iii) 山岳宗教と森 山に祖霊が集まるとする信仰は全国に分布する。青森県の恐山は特に有名で、死者の霊が行き着く霊山として東北一円で崇められている。7月末の夏参りには3年以内の死者の歯や骨を納める地藏盆会が催されるが、このときにはイタコという口寄せ巫女が集まって、死者の霊魂を呼びもどす儀礼が行われている。山形県庄内地方では、モリ供養といって、集落の背後にある小高いモリノヤマに盆に参る先祖祭祀が行われている。この地では、死者の霊魂がモリノヤマに三十三回忌までとどまって子孫を見守り、その後、忌明けになると修験道の霊山・出羽三山の一つである月山や烏海山に登っていくという。モリ供養では、修験者が施餓鬼供養を僧侶とともにやる。この修験道が、山や森林をめぐる民俗的な霊魂観の形成と伝播に大きな役割を果たした。

修験道は、各地の在来習俗を自らの宗教体系に取り込んで体系化、精緻化を進め、洗練された宗教的要素を逆に各地へと伝えた。修験道を信奉し修行する修験者は、山伏ともいわれるように山に伏す（ヤマで生活し修行する）人々であり、修験道は日本の森林のなかで育まれてきた宗教ということができる。その修験道は、すでに述べたような日本の森林、あるいは、森林に生える樹木にかかわる信仰、儀礼のみならず、口承文芸の創出と伝播にも大きな役割を果たしてきた。

日本で森林樹木にまつわる口承文芸で著名なものに、弘法伝説の一類型である「箸立・杖立伝説」がある。「箸立・杖立伝説」は、弘法大師に代表される貴人（親鸞や義経、弁慶などさまざまなバリエーションがある）が来訪したときに、食事に用いた箸を地面に突き立てた、あるいは、もっていた杖を立てかけたところ、その後、それから枝葉が出て大木になったとする伝説である。これは、元来、神が宿り憑く依り代としての樹木信仰があり、それに歴史的著名人を付会して伝説化したものと考えられる。柳田国男は、伝説の類型となる上代の信仰形態が中世において瓦解するなか、唱導文学を携えた多くの宗教者が、各地を巡行し、土地土地の衰えていく過去の事績を一定の話のパターンに当てはめ全国的に統一し伝播したと考えている<sup>3)</sup>。その宗教者として、全国を行脚した森林の宗教者＝修験者が重要な役割を果たしたと考えられるのである。

以上のように、山国日本には森林をめぐる豊富な民俗が伝承されてきた。しかし、その様相は、明治以降、近代化の過程で人々の生活と森林とのかかわり合いが変化するに伴いドラスティックに変化してきている。 [菅 豊]

## ●文 献

- 1) 徳丸亞木：「森神信仰」の歴史民俗学的研究，460 pp，東京堂出版，2002。
- 2) 柳田国男：先祖の話，253 pp，筑摩書房，1946。
- 3) 柳田国男：伝説，180 pp，岩波書店，1940。

### 2) 近代日本における精神世界の変化—近代の森の誕生

i) 都会のオアシス—明治神宮 19世紀初頭、江戸の風物について書かれた『遊歴雑記』に、一本のモミの巨木に関する記事がある。当時、彦根藩主井伊家の下屋敷に、近国に名だたるモミの大木があり、根のところには洞があって常に水を湛えていた。老いた巨木から滴るこの水は、目の病に霊験あらたかということで、近郷近在の老若男女は時折この屋敷に入って、神秘的な巨木を見物するとともに、その水を汲んで家にもらって帰ったという。この巨木、江戸の風俗誌や名所図会などに頻りに登場することから、江戸市中において相当名が知れ渡っていたことは間違いない。この木は数代にわたって育ては枯れ、枯れてはまた新しく生じたといい、そのため「代々木」と呼ばれたという。

現在、明治神宮がある代々木（現・東京都渋谷区代々木神園町）の地名は、その木の名前に由来するという。枝の広がり四方30余間（約54m）、幹の周囲が3丈6尺（約10.8m）にも及んだ大モミは残念なことに枯れてしまい、残っていた大きな株も1945（昭和20）年の空襲で焼けてしまって、今ではその雄姿をみることができない。しかし、1952（昭和27）年に、同じ場所に再びモミが植え付けられた。現在の明治神宮南参道にそびえるモミがそれである。

今、その明治神宮には、大都会東京の中心部とは思えないほど鬱蒼とした森が広がっている。それは、まさしく都会のオアシスであり、騒がしい外界から遮られた静寂のなかに、木々の香りがほのかに漂う神々しい宗教空間となっている。そこには、多種多様な樹種が混交しており、いかにも手つかずの神聖な自然が残されてきたという印象を抱かせる。しかし、その実、神秘的な明治神宮の森は人の手によってつくられたものである。しかも、まだつくられて100年もたっていないのである。

ii) つくられた「永遠の杜」 かつてモミの巨木が健在だったころ、この地は武蔵野台地のはずれで、大部分は農地や竹藪、草地、沼沢地であり、特段、樹林地として適した場所ではなかった。今のような美しい森は、明治天皇の崩御を契機としてつくられた。当初は、御陵を東京にするという強い希望が多くの人々からなされたが、陵墓はすでに伏見桃山に決定していたため、明治の大実業家渋沢栄一ら3名が有志の委員会を設立し、「御陵墓ニ代ルベキ最モ近キ方法」として「神宮」を陳情したのである。その案は1913（大正2）年の衆議院で可決され、具体的な造営を計画する神社奉祀調査会が設立された。その調査会が、多くの候補地のなかから、明治のころに南豊島御料地に編入されていた代々木を選び、そこに「天然の趣を存したる幽

「<sup>1)</sup> 遂に森厳なる森林<sup>2)</sup>」をつくるという壮大な計画を打ち出したのである。

さらに、1915（大正4）年からは実際の計画・施工を行う明治神宮造営局が、それを引き継いだ。その過程で神宮内苑は、神苑として最もふさわしい神聖な天然更新に基づいた「永遠の杜」の伝統イメージが投影された。しかし、その伝統イメージは、森林自体を祭祀崇拜の対象とする在来の民俗的イメージと直結するものではない。むしろ、近代に入って新しく国家のイデオロギーによって再構成されたイメージである。それはすでに確固として定まっていたのではなく、この時期に新しく創造されている。たとえば、調査会長大隈重信は、伊勢神宮や日光東照宮のように整然と居並ぶ杉並木をイメージしたらしく、多くの在来種を基礎にすることを主張する技術スタッフに強行に反駁している。大隈は、結局、技術スタッフの科学的根拠に基づいた粘り強い説得に折れた。しかし、それによって完全な在来種の森がつくられたわけではなかった。

現在の神宮内苑の森は、植物社会学的な構成種の内容からいえば、その多さはきわめて異常である<sup>3)</sup>。もし、本来の武蔵野の森林植生が残っていたならば、ごく限られた樹種で構成されていたはずで、天然を志向するならば、そこに構築されるべき森も樹種の貧弱な雑木林が妥当である。しかし、現実には、この地には存在しない樹種を含む365種にもものぼる木々を有する幻想の森が幽邃、荘厳、神聖たる神社林イメージによって現出した。

表 5.1 搬入済献木其他本数取調表（大正9年9月4日調製）

\*府県、地方名は記載順（『明治神宮』1920<sup>4)</sup>より作成）

地方別（府県）	搬入本数	地方別（府県）	搬入本数	地方別（府県）	搬入本数
東 京	14404	岐 阜	180	香 川	2366
京 都	861	長 野	1039	愛 媛	435
大 阪	1951	宮 城	1289	高 知	1389
神 奈 川	1040	福 島	3107	福 岡	4861
兵 庫	2449	岩 手	206	大 分	775
長 崎	557	青 森	1432	佐 賀	430
新 潟	1182	山 形	1443	熊 本	201
埼 玉	10564	秋 田	33	宮 崎	829
群 馬	978	福 井	202	鹿 児 島	731
千 葉	1033	石 川	540	北 海 道	834
栃 木	299	山 崎	833	台 湾	7421
茨 城	689	鳥 取	273	朝 鮮	527
奈 良	720	島 根	1659	樺 太	54
三 重	895	岡 山	11107	北 京	2
愛 知	1036	広 島	4681	沖 縄	16
静 岡	1654	山 口	1622	関 東 州	660
山 梨	846	和 歌 山	708	直 轄 学 校	691
滋 賀	632	徳 島	1183	計	95549*

\*『明治神宮』には総計95569本となっているが、地方別本数の合計と合わない。

明治神宮内苑が、このように異常なほど樹種が多くなった理由は、造営時に全国各地より献木を受けたためである（表5.1）。先に述べたように既存の森林は貧弱であり、残りの部分を埋めるために造営局は購入や他の国有地などからの移植とともに、全国各地から木の献納という方法を採用した。これに多くの地方がしがたがった結果、全国より9万5000本以上もの木々が集まった。この数は、神宮内苑の樹木全体の8割以上を占める。献木にあたって外国種を制限したが、当時領土であった樺太（サハリン）や、台湾、朝鮮半島などの植民地、侵略の矛先を向けつつあった関東州（中国北部）や北京に献木を求め、これを受けている<sup>4)</sup>。

この献木運動の発案者は、初代造営局長井上友一である。イギリスの田園都市を日本に紹介したことで有名な井上は、内務官僚として地方行政に辣腕をふるった。彼は内務省で地方官会議が開かれたときは自ら出席して献木について説明し、また府県から人々が集まる各部局の会議には局員を派遣し、さらに献木に関する印刷物を製作して各町村に配布するなど、地方からの献木運動を積極的に推し進めた。この運動は、単に樹木の購入費用を軽減させるためだけでなく、特別な意図をもって井上により日論まれたようである。

iii) 国家イデオロギーによる森林の創造と破壊 日露戦争終結後、多大の戦費支出による財政破綻や、社会矛盾の激化、講和への不満などで動揺した国民を、国家主義で統合することを目指す地方改良運動と呼ばれる内務省主導の官製運動が展開される。国民のエネルギーを国家のもとへ統合することにより帝国主義の基礎を固め、ひいてはその後第二次世界大戦まで連続する挙国一致の潮流へとつながった。この地方改良運動を内務官僚として実務面で推進したのが井上友一であった。彼は1909～1911年にかけて国家の要請に応える強力な町村をつくるために、地方改良事業講習会を開催し、地方の模範人物を養成した。その彼が、明治神宮の森の誕生に大きく関与していたのであった。すなわち、明治神宮の献木運動と地方改良運動は軌を一にし、国民統合運動として企図されたと考えられるのである<sup>5)</sup>。彼によって集められた森の木は、当時の日本の版図にある樹種である。しかし、その多種多様な樹種が組み合わせられた総体としての森林は、日本のどこにもない森林であり、「国家の森」というコラージュなのである。

豊かな木々で満たされた「国家の森」が生まれたこの時期、それとは裏腹に多くの「村の森」が失われていったことは看過できない。明治末期、内務省神社局は神社合祀政策を実施し、その結果、全国の神社数は1905（明治38）年に19万5000社あったものが、わずか5年後の1910（明治43）年には14万1000社に激減している。この時期の神社合祀は、先に述べた地方改良運動と結びついて一町村一社を目指したものである。それは在地の細分化した神社を合祀、整理し、空いた跡地を神社財産とし、有力神社をつくってその権威を高めることにより、国教たる神道に崇敬を集めて精神

の統合に役立たせようという発想であった。この政策に1908年当時内務省神社局長であった井上友一が関与していたことは想像に難くない。結果、廃社になった多くの境内林の木々は、売却が自由となり伐採され、鎮守の森として守られてきた貴重な自然が失われたのである。

豊かな木々を育む明治神宮の森の成立は、現代的な解釈において都市型公園の創出として、また、国民参加型の自然保護として高い評価がなされている。しかし、そのような豊かな森林の誕生の背景には、近代日本の国家的、政治的イデオロギーが存在したこと、そして、そのイデオロギーは、一方で多くの森林を破壊してきたことを、われわれは見逃してはならない。

(菅 豊)

## ●文 献

- 1) 明治神宮奉賛会：明治神宮御造営ノ由来，14 pp，明治神宮奉賛会，1932。
- 2) 庭園協会：明治神宮，p 101，嵩山房，1920。
- 3) 松井光瑤ほか：大都会に造られた森，p 68，農山漁村文化協会，1992。
- 4) 庭園協会：明治神宮，pp 101-112，嵩山房，1920。
- 5) 高木博志：近代神苑試論。歴史評論 573，16-27，1998。

### 3) 17～18世紀の北奥羽山村における山野利用

i) 獣害に悩む村 17世紀から18世紀にかけての時期、本州の北端にあたる岩手県北部・青森県東部（盛岡藩・八戸藩）を対象として、山野利用がどのようなものであったのか、自然・生態系と人間諸活動の関係に亀裂を生じている問題に目を向けながら述べてみたい。最初にこの時期を象徴している村人たちの2つの訴願を紹介しておこう。

①延享2(1745)年10月、北奥八戸藩（青森県東南部・岩手県北東部、2万石）の阿子木村、帯島村、水沢村・大野村（以上現九戸郡大野村）の四か村は支配代官に対して、猪・馬による作物被害を訴えた。われわれの村は四方山野に囲まれたなかに耕作地があり、猪に荒されている。とりわけ近年、猪が多く子を産み、屋敷内の菜園にまで入り込んで掘り食う有様である。そのために所々に案山子を立て、番小屋をつくって追い払っているが、効果がなく損毛となっている。また、侍浜北野牧（現久慈市、盛岡藩の飛地で藩牧）の野馬が殖えたためか、境を越えて四か村の山野へ侵入し、山野を枯らし、畑作物に被害を出している。なかには野印のない馬も混じっており、それは着驢馬であろうか。日夜番をしているが、あつという間に荒されてしまう。猪は冬に大雪が降ったとき狩りをする覚悟であるが、難儀なことである。野馬は藩牧の馬なので恐れ多く、荒々しく追い払うのは遠慮している。控え目ない方だが、年貢の減免や野馬対策を求めるものであった（『久慈家文書』）。

②寛延元年（1748）4月、城内村（現九戸郡種市村）の百姓たちも同様に猪の被害を訴えているが、状況はもっと深刻だった。山根にあるこの村は草深く猪が繁殖

しやすい土地柄である。猪が年々増加し、作物を「黒畑」同然に食い荒らすので収穫がほとんどなく、食料に窮している。そこで、葛・蕨を飯料として飢えを凌ぎたいので、助命のため「葛いせ舟」（澱粉を沈殿させるフネ）に使う「あも木」（用材にならない悪木）を「御山」（藩有林）から家1軒につき1本ずつ貰いたい、という願いがあった。八戸藩はこれを許可している（『八戸藩日記』）。

この2つの事例は獣害に悩まされる農民の窮状を物語っている。加えて①では越境してくる野馬の被害が訴えられていた。猪は現在この地域にはまったく姿をみせないが、17～18世紀には本州の北端まで猪が生息していた。特に1740年代その異常繁殖がピークに達し、寛延2年（1749）には、八戸藩でいわゆる「猪飢饉」が発生しており、このために山間の村中心に餓死者が3000人ほど出たという。猪の繁殖とその食害は隣の盛岡藩でも同様の事態であったことが藩日記『雑書』からうかがわれる。

ii) 獣害の背景—焼畑と馬産— なぜ、このように猪が異常繁殖したのであろうか。原因はこの時期の山野の利用・開発と密接にかかわっていた。それは大きく2つの側面から説明されるように思われる。

1つは山野に焼畑（切替畑）が急速に拡大していったことである。近世の焼畑の面積はどれくらいあり、いつごろから増えたのか不明であるが、明治期のデータでは岩手県や青森県は広く分布する地域であった。八戸藩領のあった北上山地北部はその中に入っている。八戸藩の獣害を示す史料には、よく「山端畑」が猪にことごとく掘り荒らされていると出てくるが、青森県の明治初期の用例に「切替山畑」とあることからすれば、この山端畑は焼畑を指しているものであろう。山端畑の作物が猪のいちばんの標的となったのである。

焼畑が山野に切り開かれていった理由には、市場経済と結びついた大豆生産が深くからんでいた。粟・稗・蕎麦といった作物とともに数年間のサイクルで栽培したあとに放置されたのであるが、大豆がこの地方の換金作物として最も重要な位置を占めており、17世紀後期にはすでに江戸商人なども入り込んで買い付けが盛んに行われていた。大豆は後述するこの地域の産業の柱である馬産のための飼料であったことが、いっそう大豆生産を促していたとみるべきである。放置された焼畑には蕨や葛が繁茂し、それがまた猪の繁殖を促す契機になったとも考えられている。八戸藩は、冬期に鉄砲を百姓に貸与して一斉駆除に乗り出すとともに、猪の生息するような野山を春に山焼きするなどして、獣害に対応していた。

もう1つの猪が繁殖した理由として間接的ではあるが、馬産の影響が挙げられる。青森県東部・岩手県北部は中世以来、全国的にも知られた馬産地帯であった。藩営の牧が広大な野を抱え込めかたちで設営されていた。盛岡藩には、住谷野・相内野・木崎野・又重野・大間野・奥戸野・有戸野・三崎野・北野の九牧があり、八戸藩には広野・妙野の二牧があった。このうち、三本木原台地にあった木崎野（現在の十和田市・

## 編者略歴

井上 真 (いのうえ・まこと)  
1960年 山梨県に生まれる  
1983年 東京大学農学部卒業  
現 在 東京大学大学院農学生命科学研究科助教・農学博士

桜井尚武 (さくらい・しょうぶ)  
1945年 群馬県に生まれる  
1970年 東京大学農学部卒業  
現 在 森林総合研究所理事・農学博士

鈴木和夫 (すずき・かずお)  
1944年 茨城県に生まれる  
1968年 東京大学農学部卒業  
現 在 東京大学大学院農学生命科学研究科教授・農学博士

富田文一郎 (とみた・ぶんいちろう)  
1942年 東京都に生まれる  
1966年 東京大学農学部卒業  
現 在 筑波大学農林工学系教授・農学博士

中静 透 (なかしずか・とおる)  
1956年 新潟県に生まれる  
1983年 大阪市立大学大学院博士課程修了  
現 在 総合地球環境学研究所教授・理学博士

## 森 林 の 百 科

定価は外面に表示

2003年12月1日 初版第1刷

編集者 井 上 真  
桜 井 尚 武  
鈴 木 和 夫  
富 田 文 一 郎  
中 静 透  
発行者 朝 倉 邦 造  
発行所 株式会社 朝 倉 書 店

東京都新宿区新小川町6-29  
郵便番号 162-8707  
電 話 03(3260)0141  
FAX 03(3260)0180  
<http://www.asakura.co.jp>

〈検印省略〉

© 2003 (無断複写・転載を禁ず)

新日本印刷・渡辺製本

ISBN 4-254-47033-9 C 3561

Printed in Japan